

だからアタシは鬼じゃねえっつっ  
てんだろうが!?

七日 八月

——雪のように白い肌。

そこに浮かぶ刺青のような黒い模様。

緋色と山吹色の虹彩異色の瞳。

額から生える一本の黒い角。

彼女の名は『セキレイ』。

彼女は、人を喰らう鬼……

……などではなく、オラクル船団のアークスに所属するデューマンである。

クラス・ブレイバー、カタナを携えたアークスが、悪鬼が跳梁跋扈する大正の世を征く！

「だからアタシは鬼じゃねえつつつてんだろうが!？」

……なお、その見た目のせいで鬼殺隊の鬼狩りに散々追い掛け回される模様。



# 目次

鬼を狩る鬼？　いいえ、デューマンです。  
アタシの生き方、アタシの生き様。



1 鬼を狩る鬼？ いいえ、デューマンです。

鬼を狩る鬼？ いいえ、デューマンです。

本作は、

「光属性の武器とか地味に鬼特攻じゃね？」

「なんならそもそもフォトンの力で鬼自体焼けそうじゃね？」

という発想から生まれました。

ぶっちゃけ鬼の血ってダーカー因子ほどの浸食力無さそうだし、理論上何でもアリなフォトンならイケルイケル。

では本編をどうぞ。

「……だああああああっ!? しつつこいんだよクソがあっ!?」

——ハロー妹分イオ。元気ですか？

お姉ちゃんは元気です。

朝目が覚めたらいきなり知らない土地に放り出されていてビックリ。

慌てて本隊との通信を試みるも一切繋がらず、それはもう盛大に焦りました。

しかし、こちらも驚きましたがそちらも大いに慌てている事でしょう。

本当に申し訳ない、でも不可抗力です。

アタシは悪くねえ。

まあ、以前も似た経験をしていたので割と直ぐに落ち着きました。

……状況を理解した時には「またかよクソがふざけんな!!」とキレ散らかしていましたが、それはそれ、です。

とりあえず、どうにかこうにか生きています。

そんなお姉ちゃんは今、

「そっちだ！ そっちへ行ったぞ!!」

「おのれ悪鬼め……！ 絶対に逃がさんぞっ!!」

現地民から、

3 鬼を狩る鬼? いいえ、デューマンです。

「だあからあ!! アタシはあ!! 鬼じゃねえつつつてんだろぅがあああ  
ああああっ!?!」

全力で命とがうけそのう鬼ちごっこうです。



——  
数十分前。

「…………ふわあ……………良く寝……………ほア?」

目が覚めた直後、視界に広がった光景に思わず間抜けな声が口からこぼれた。

具体的に言うと、見渡す限りの森&森。何ならベッドの上ですらない草むらの上、おいおいコイツは一体何の冗談だ？

一応頬を抓ってみる、痛い……夢じゃない。

自分は誰だ？ 名前は『セキレイ』、オラクル船団超巨大な惑星航行船団、1隻のマザーシップと多数のアークスシップで編成されている。のアークスオラクル船団に存在する組織、正式名称『Artificial Relict to Keep Specie』、訳すると『人為的なる残存種の保護。そのための聖櫃、あるいは方舟』的な意味らしい。の一人だ。

うん、大丈夫、記憶障害とかは一切発生してない。よな……？ 正直自信が無い、だってアタシは昨日、普通にマイルームで就寝した筈、なのに起きたら暗い森の中、イミガワカラナイ。

こんなの誰だって戸惑う、六芒六芒均衡、旧体制のアークスにおける最高戦力。メンバーは零から六のナンバーを振られる。なお零は基本的に秘匿された存在であるため「七芒均衡じゃないの？」とツッコんではいけない。だろうが守護輝士ガーディアン

現体制のアークスにおける最高戦力の一角、この肩書きを持つのは主人公（プレイヤ―）とヒロインの内の一人の計二人だけ。殆どの権限に縛られない代わりに上位の命令権限等も持たない。だろうが宇宙猫顔晒すに決まってる。本当にイミガワカラナイ——ツ!!

「……オイちょっと待て、まさかっ!?!」

そうして状況の確認をしている最中、前にも同じような事があったのを思い出して背筋が凍りついた。

もし以前と同じであれば状況は最悪だ……! アタシは慌ててアイテムパックを確認してみた。

「……ツハア、セーフツ! 丸腰じゃなくて良かったア……!!」

思わず安堵のため息が出る、アイテムパックにはいつもの装備に各種アイテム類がきちんと収まっていた。

本当に良かった……今回のは着の身着のまままで放り出された訳ではなかった様だ。

ひとまず、よっぽどの事が無い限りどうにかかなりそうな事は判ったので次は現在地の確認だ。

「……マッピングは……出来てるな？」

マップ機能に対するジャミング等は無し、現在居る場所を中心に障害物の位置等がきちんと記録されている。

つまり、ここは特殊な条件下に置かれた異空間等ではないようだ。

……まあ空間そのものに異常がなかったとしても状況は異常以外の何物でもないのだが。

「ひとまず歩いてみるかあ……幸い月が見えてるし、今アタシが向いてる方角が南って表示され………あん？ 月イ？」

改めて空を見れば煌々と輝く満月、その表面には見覚えのあるクレーターがたくさん。

あつ、ウサギさんが見えますね！ ……おいマジか。

「ええええ……ウソだろ？ オイ、地球って………なんでエ……？」

声が震える、なんなんだマジで？ 『目が覚めたら現在地はまさかの太陽系第

三惑星・地球でした』ってか？ 売れないラノベのタイトルかな？

いっそ『悲報』現在地はオラクル側の宇宙ですら無かった件【ボスケテ】って

スレでも立ててやろうか。

……現実逃避はやめよう、悲しくなってきた。

「しかし、そうなる通信が繋がらないのはどういった……？」

現在地が地球であるならば、どこに居ようが通信は本隊にも繋がる筈だ、なのにいくらやっても繋がらない。

実はここはアークスシップ内の施設のVR空間で、誰かの仕掛けたドッキリでした、なんていうオチも考えたが、即座に否定する。

「コイツはデータじゃねえ、本物の生き物だ」

目の前の樹木にくっついてた虫がちゃんと生体反応を示している、つまりはそういう事だ。

そうなると、残る可能性は「見つけたぞ鬼めっ!!」……あん？

声のした方向を見れば、どこかで見たような覚えのある服装にカタナを持った男が一人。

なんだかとても殺気立っていらっしやる、隙を見せれば今にも斬りかかって来そうだ。

マップを見ればこちらに接近してくる同じようなサイズの反応、思わず真顔になった。

「コイツ、隙が無い……！」

「焦るな、二人でかかれば……」

どうも敵意剥き出しなその様にため息が漏れる。なるほど、大体わかった。

鬼かー、そっかー、まあ似てるよねえ、アタシってオラクル産のデューマンPS O2の世界以外、PSUシリーズのPSPO2iにも同名の種族が登場する。が、名前だけ同じのほぼ別物。だし。

おそらく今のアタシは死んだ魚みたいな目をしている事だろう、鏡を見なくてもわかる。

デューマン、肌は大抵色白を通り越して白く、そこに部分的に刺青の様な黒い模様が浮かぶ、頭に角を持ち、瞳は特殊な虹彩になりやすい、そんな種族。

遺伝子操作やら何やらで生み出された人造の種族であるが、そもそもアークス全員の種族もそんな生まれだし、ていうかそんな事はどうでも良い。

鬼、アタシの想像通りなら、おそらく人喰い鬼の化け物の事だろう……見た目が

似てるからそんな畜生共と間違えられた？ 冗談じゃねえ!!

「……アタシはあんな畜生共じゃねえ……!」

ぼつりと呟きながらアタシも自分のカタナを取り出す、どこからともなく現れたカタナに目の前の二人組が息を呑むが、知ったことじゃない。

そうして、得物を構える二人組に視線を向け、いつでも抜刀出来るようにカタナを構えたアタシは――

――その場から脱兎の如く逃げ出した。

仕方ないじゃん！ 何せ相手はフォトンなんかすごいエネルギー、設定的に恐らく何でも出来る（誰でも出来るとは言っていない）。の保護だとかそういう類のモノが一切無い人間。

こちらからお前らの敵よりもっとヤベー化け物と普段から殺しあっているのだ、加

滅に失敗したらどうなるか想像したくない。

何より撃退するなんでもってのほかだし、下手に交戦した結果どんな影響があるか判ったモンじゃないし。

「!!!??!!?」

「逃げた!? 追うぞっ!!」

全く以ってフザケてやがる。ああそうかい、今度はよりにもよって『鬼滅の刃』か。

「またかよクソがふざけんア!!」

ブチギレながら全力でカタナのフォトンアーツ略称PA、ドラクエで言う特技、なおドラクエで言う魔法的な物はテクニクという物が該当する。・アサギリレンダ  
ン高速移動した後に静止して前方を斬り刻むPA、静止する前にキャンセル出来る。  
を連打して逃げる、長距離移動が前提なので今回はガーキャンガードキャンセル、  
なおガーキャンしたアサギリは全移動系PA中最速。ではなくステキャンステッ  
プキャンセル、アサギリステキャンも十分はやい。でいい、さーてトンズラだー!

(涙)

……なんか途中に件の人喰い鬼が居たからすれ違い様に斬り捨てといた、ちよつとスツキリした。

「……馬鹿な、鬼が鬼を狩っただと……?」

「一体どうなっているんだ……!？」

なんか注釈だらけになった。

なおセキレイちゃんの武器は、

クラスサーベル（武器フォーム・オロチアギト）属性：光

OP 構成は、

S1：錬成の志 2

S2：妙撃の志 2

S3：妙撃の志 2

S4：妙撃の秤

S5：反撃鋭刃

ガーディアン・ソール

ディバイン・オーダー

イクシード・エナジー

となっております。（筆者は持ってません）

アタシの生き方、アタシの生き様。

お待たせしました。

想定よりお気に入り登録数が多くてビックリ。

ありがとうございます。

あとここまで遅れた言い訳ですが……

自分PC無いと書けないマンなのに体調崩し気味で長時間PCの前に座れなかったもので……

以前ケータイでどうにか書こうとして途中で全滅したのが地味にトラウマなので……

言い訳はここまでで、本編をどうぞ。

---

走る、走る、森の中を、どこまでも速く、早く、眼前の敵クズを撃滅する為に。

「ク、クソオツ！ な、何で同族が俺の命を狙うんだよおっ!？」

アタシから逃げ続けている片腕の無い鬼畜生が喚き散らしているが知った事じゃない。

だってアタシ、お前らの同族じゃねえし。

大体テメエは命乞いをした人間を見逃したりしたか？ 折角のエサを逃がすワケねえよなあ、だってテメエは人喰い鬼だもんなあ。

「そ、そうだ！ 俺と組まねえか!? あ、アンタの下にならついてやってもいい!! あの位の村なら、アンタとなら鬼狩りにバレル前に一網打尽だぜえっ!？」

「……………ハア……………」

素晴らしい提案をしよう、とでも言わんばかりに戯言を抜かす鬼にため息が出る。いやはや全くこの鬼は本当にアタシの事を馬鹿にしてやがる。

アタシは鬼が群れない事もその理由も知ってるし、隙を見せたアタシを喰うつもりなもの、その憎悪に野心たっぷりの目を見りゃ判る。

「チツ……………」

……………ああ、胸糞が悪い、とつとと消えろ、人の世の塵が。

「……………グレンテッセン」

疾走から更に加速し、高速で滑るように接近して抜刀し、鬼の両足を叩き斬りつつ背後に回り、足を失い落ちて来た鬼の体に追撃の一閃を叩き込み首を落とす、それで終わりだ。

「……………お、前、その姿で、鬼じゃない……………のか？」

「今際の際に気付けただけ褒めてやる……………来世は屑に堕ちるんじゃねえぞ」

塵になって消えていく鬼に背を向けつつそう呟きながらその場を去る、少し前に狩った雑魚鬼は気付かれる間もなく背後からアサギリで切り刻んで終わりだったが、今回は少し手間取った。

そこそこ人間を食っていたせいで実力がついていたらしい、アタシの奇襲がバレてしまった……………とはいえ、奇襲に気付けただけで結果はご覧の通りだが。

……………この世界に来てから早ふた月、定期的に奴らの同族と勘違いされるのは、もう慣れた……………

いや、鬼狩りの連中に間違えられるのは半分仕方ないと思うが、鬼にまで勘違いされる事があるのは何なんだ。

そのうち半分くらいは匂いで気付いて「姿を真似て誤魔化せる訳無いだろ」と馬鹿にした上で襲い掛かって来やがった、別にコレはテメエらの真似じゃねえし生まれつきだクソが！

さて、そんなアタシが今居る場所とはある農村の近くにある裏山だ。

鬼狩りから逃げつつ情報収集をしている最中、どうも鬼の被害に遭い始めている雰囲気を感じたので鬼狩りの代わりに奴らを狩ろうと思ひ立ち、今しがた終えた所だ。

鬼狩り……鬼殺隊の情報収集能力を侮っているわけじゃないが、どうしてもその性質上後手に回らざるをえないからな。

恐らくアイツらがこの村の状況に気付くのはもつと被害が酷くなってからだろう、うちのシャオオラクル船団の管理統制を行っているすごいヤツ、二代目。みたいに先の事がある程度演算で予測出来りゃ先手を打てるが、そんな手段ねえし。ま、ともかくコレで一件落着だ、今後ヨソから鬼クズが来ない限りは、若しくはこの村に頭無惨な鬼の首魁ズが現れなければ、だがな。

ちなみに今のアタシの格好は『ケンランバカマ紅』、PSO2の和装シリーズの

一つだ。一応この世界の時代に合った服装をチョイスした。

今は外していたが、日中は『自由惑星……なんちゃらベレー帽正式名称、自由惑星同盟軍ベレー帽。某英伝コラボアイテム。セキレイは興味の無い物の名前は基本うる覚え。』を頭に被って角をどうにか誤魔化している。

ぶっちゃけ他の手持ちの和装は『ヒメナギセイカイ紅いわゆる巫女服っぽいヤツ。』ぐらいしか無かったからな。

まっ、現状を考えれば十分及第点だろ。

ただ、服装は問題ない筈なんだが、結構視線が集中するんだよなあ……髪色が明るめの青みがあったグレーに緋色と山吹色のオッドアイの時点でもうどうしようもねえか。

正直言うと普段任務中に着てた『アドミラマリーネ曜海軍提督っぽい衣装。』とか着たいトコだったんだけどな。

……この時代の軍やら警察やらに目を付けられるのはマジで面倒だからなあ……  
我慢我慢。

「はあ……メンドくさ……」

ああ、あの頃が懐かしい、服装にケチをつけられる心配もないどころか、周りのオモシロコーデで笑っていたり、ビシッとキメたコーデでクエストに行ったり……まあ、それはディスプレイ越しの三人称視点だったんだが。

「……思えば随分遠くへ来たモンだ」

元々アタシはただの人間だった、それがある時気付けば着の身着のままで見知らぬ土地に放り出され、そこで仲間と共に世界を元に戻す戦いに身を投じたりして……全てを終えたと思えば、今度はアークスシップの中。

前の世界でどうか日銭を稼いでネカフェ暮らしをしてる最中、元の世界のPSO2のアカウントが何故か使えた時から嫌な予感はしていたが、まさか本当にオラクルに飛ばされるとは思わなかったな、それも今度はプレイヤーキャラクターに転生と来たもんだ。

そう、この『セキレイ』という身体は手塩にかけて育て上げた自キャラだった。装備品もアイテムもまるっと引継ぎだ、至れり尽くせりだ、世界が世界じゃなけりゃな!!

ちなみに名前の由来は鳥の『鶺鴒』じゃなくてアタシの本名が『関<sup>せき</sup>怜<sup>れい</sup>』だった

から。まさかの本名プレイだぜ、笑えよベジータ声PSO2に出てくるキョクヤというキャラクターの声があの人の声。 ……ん？ ネットリテラシー？

大丈夫だ、（誰だろうと鳥の方しか連想しないから何も）問題ない。

いやあそれにしてもあの時は参ったね、立場がゲーム時代でいう安藤安藤優しゅじんこうあんどゆう。ファンタシースターシリーズにおいてユーザーがつけたプレイヤーカーしゅじんこうに対する通称。PSUのスタックレジットで表示された『AND YOU』からきている。じゃなくて、アタシは主人公と同期のアークスだったからな、ある意味立ち回りに非常に困っちゃった。

本当に、一歩間違えりやどうなってた事か……そこら辺を実はこっそりフォローしてくれてたらしいシオン全知存在。色々やりながらオラクル船団の管理統制を行っていたすごい存在。初代マザーシップそのもの。には、絶対に足を向けて寝れないね。

結果的に、プレイヤーキャラが二人に増えたような状況を生かして救えなかった筈の命を救えたりしたからな。

そう、死ぬはずだったヤツをいっぱい救って来た、オラクルでも、その前の世界

でも。

とにかく必死だった。死んでしまうキャラがかわいそうだったからとか、もしこのキャラがこの時も生きていればどんなもしも二が見れるのだろうとか、そんなチープな気持ちじゃない。

アタシ自身が今のこういう状況に置かれる事になる前、相手の都合で理不尽に命を奪われた身だったから……誰かの都合で理不尽に命を奪われた彼ら・彼女らの事が、他人事とは思えなかったんだ。

そうやって誰かを救おうと、必死に抗い続けてきた、だから——

「——怜さん、どうかしたの？　なんだか少し黄昏れていたみたいだけれど……」

「ん？　ああ、昔の事を思い出してただけさ、大した事あねえよ

カ・ナ・エ」

——コイツの事も理不尽な死から救い出してえなつて、どうしても思っちまうんだよなア……



——胡蝶カナエ、原作『鬼滅の刃』で蟲柱・胡蝶しのぶの姉で、花柱だった女性劍士。

作中、主人公の物語が始まった時点で既に故人、回想等に出てくるだけだったが、それでも十分に印象を残したキャラクターだった。

漫画の時点であれだったんだ、実物に会っちまえばそりゃあますます印象深くなる。出会い方にしても、他の鬼狩りの連中と比べるまでもなくずいぶんと穏やかだったからな。

因みにアタシはカナエに『セキレイ』ではなく『関怜』で名乗っている、今でもこつちがアタシの名前だっと思ってるし、此処は日本だからな。

「ていうか、何でここに……ああ、さっき殺<sup>や</sup>った鬼が目当てだったか？　悪いな、鬼殺隊を待ってられなかつたんで先に狩らせて貰ったぜ」

ニヤリと笑いつつそう言って、少し皮肉が過ぎたかな、と反省しつつカナエを見やると驚いたような顔をした後に目を伏せてしまった。あっ……

「……そう、あの村も既に鬼の被害に遭っていたのね……」

……そんな顔をさせるつもりはなかつただけだな……言葉選び、間違えちまつた。

「悪い、皮肉を言うつもりじゃなかつたんだ……」

「……ううん、良いの、間に合わなかつた事実は変わらないもの」

あークソ！　口は災いの元とは言うが、どうしてこうアタシは「クスクス……」

あん……………?

「……………おい、カナエ? お前まさか……………」

「ごめんなさいね? でも先に皮肉を言ったのは怜さんよ?」

「どうやらアタシはカナエに弄ばれたらしい……………まあ、全く気にしていないワケじゃなさそうだが、切り替えて大事だしな、うん。」

「……………別に騙された事なんざ気にしてねえし。」

「もう、そんな拗ねたような顔をしないで? からかったのは私が悪かったから」

「別に気にしてないったら気にしてないしィツ!! ……で!? 用件は何なんだよ!?」

「そうだよ!! 気にしてないったら無いんだよ!! 何度でも言ってやる! 気にしてないっ!!」

「あらあら……………すっかりご機嫌斜めね、これじゃあ交渉どころじゃないわね」

「あん? 交渉? ……ああ、あの件か」

「そうよ、どう? 考えてくれたかしら?」

あの件、アタシはずっとカナエから鬼殺隊へ勧誘され続けている。どうやらコイ

ツの独断ではなく鬼殺隊の当主からの密命のようなのだが、アタシの答えは決まっている。

「悪いけどその話は断ったはずだ。アタシが鬼じゃないのはありとあらゆる手段で証明したが、未だに鬼狩りに襲われる件も気に入らないしねえ」

「それは、本当に申し訳ないと思ってるわ……でも怜さんが「あのな」……？」  
そろそろアタシの立場をはっきりとさせるべきなんだろう、半端な回答で避けてきたから変に期待させちまったみたいだが、その期待に応える事は絶対に無い。

「悪いが、アタシもこれでとあるデカイ組織に身を置いてる身なんだ、鞍替えは出来んし、する気もない」

——だってアタシは、アークスだから。

大半の鬼狩りに言わせればアタシは異端の力を使う者だ、鬼の血鬼術とは当然違うが、アタシは奴らの言う所の異端の力を使っている。

水と油とまでは言わない、だが相容れることは決して無い、日本ってのはそういう国だ、アタシがかつて生きていた時代も、この時代も変わりはない。

自分達と違うものを極端に嫌う、嫌悪する、排他する。曖昧な表現が得意だから

外から見たら気付きにくいだけ、お客様なら丁寧に招くが、そうでなければ村八分だ。

「ついでに言うと、アタシの肩書きもお前らで言う所の柱みたいなモンなんでね、後は判るだろう？」

「……!? そう、だったのね。道理で強い筈だわ……」

アタシは本来居る筈の無かった存在、居る筈の無かった3人目の守護輝士ガードイヤン。なるつもりは無かった、けどシオンの遺言じゃ無碍にも出来ない。

お陰さまで気付けば英雄の一角だ、アタシは英雄とは程遠い存在なのに。

それでもオラクルの皆は、そんなアタシを大事な仲間だと、友だと言ってくれる。そんな仲間達が、戦友達が、アタシにとっちゃ掛け替えのない大事なモンなんだ。だからアタシは、鬼を狩る事はすれど鬼殺隊に所属する気は欠片も無い、二束の草鞋を履く気は無い。気持ちの問題と言われるかもしれないが、これって結構大事な事なんだ、自分が何者かを見失わない為に。

大体、仲間意識アタシを鬼と疑う奴らの無い奴らの中に混ざっても不和を生むだけだ、誰も得はしない……ただそれを勘定に入れても、アタシの力を利用したいんだろうなあ、鬼殺隊

の当主殿は。

だが、アタシと鬼殺隊じゃ鬼に対する感情が違いすぎる。

あいつらは『鬼』に対して強い気持ちを持っている、熱量を持っている。これ以上被害を増やさない為とか、同じ思いをする人を増やさない為とか、鬼への復讐心とか、色々あるが、アタシには『鬼』に対するソレが無い。そういう熱量の違いは、いずれ大きな軋轢を生む。

アタシは、アークスだ。現地の危険生物の排除による生態系の保護・維持が仕事の一つだ。

仕事に対する使命感とかやる気、熱意はあれど、鬼に対するスタンスはどちらかと言えば害獣駆除と変わらない。

そして、アタシ自身の『理不尽な死に対する抵抗の意思』が『全ての鬼』に向く事は無い。アタシが救いたいと思っても救えないヤツは居る、それを嫌というほど経験して、理解しているから。

アタシは全てを救える英雄じゃない、アイツらとは違う、身の程を弁えてる、全てに手を伸ばして本当に大事なモンを取りこぼすような愚かな真似は決してしない

と心に誓ってる。

だから、

「ま、そういうわけで、だ——」

「残念、ふられちゃったわね……」

「——外部協力者って形なら、手を貸してやれるぜ？」

コイツらとしっかりと足並みを揃えるのは、最後の最後だけだ。

「……えっ？」

アタシの言葉を聞いて呆けるカナエを見て、思わず盛大に笑ってしまった。

……別にさっきからかわれた仕返しじゃねえぞ？

意外とセキレイちゃんは経験豊富です。

次回は恐らくカナエさん視点になる予定です。  
ではまた。

だからアタシは鬼じゃねえっつってん  
だろが!?

---

著者 七日 八月

発行日 2021年11月19日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/271255/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。